研究ノート

はんだの祭と岸和田だんじり祭の比較

山　田　正　人

Ⅰ．はじめにー東海地方の祭りと半田のまつり

東海地方には多くの祭りがあるが、そのなかでも、春に行われる半田の山車を曳き出す祭りは「ぜい」をつくした祭りとして有名である。

東海地域の各地には、この形態の祭り、すなわち山車まつりがあり、高山祭、犬山祭などからくり人形を演ずるのが多いことが特徴であるが、子供歌舞伎を演じる祭りもある。

岐阜県、垂井の曳山祭りでは山車の上で子供歌舞伎が演じられる。大垣では、子供歌舞伎が演じられていたが、今日では子供舞踊となりからくり人形が主である。垂井の曳山祭りは 1353 年、大垣のまつりは 1648 年に始まったとされている。垂井の曳山祭りは、北朝後光厳院帝が来られた時にはじまったとのことで、都の祇園祭を模して創められたといわれており、古い祭りの形態である。子供歌舞伎は 18 世紀にはじまったとされている。

愛知県津島の天王祭りには船に乗った“だんじり”が登場する。津島の天王まつりは 1522 年には記録に登場しており、信長が見たとの記述があることから、この地方の比較的古い祭りの形態が残っていると考えられる。大垣のまつりは、垂井と津島祭りの後、始まっているので、折衷型とも考えられる。

さて、尾張の祭りと題するホームページに次のように述べられている。(http://www.owarino.jp/ot/tokainodashi/tk501.htm : 090610)

「東海地方の山車の特徴は、その数が多いことに加え、山車の形態、装飾、芸能などが非常にバラエティに富んでいることである。尾張周辺には名古屋・

東照宮祭の影響を受けた山車が広く分布しており、名古屋型、犬山型、知多型、挙母型、大垣型、高山型など複雑に分化している。これらの中には、からくり人形に力を入れるもの、彫刻や掛物に優れたものなど様々な趣向がこらされている。

一方、三重県北部には石取祭車、鯨船という特異な山車があり、また関西と接する地域には京都祇園祭を真似た京都型、子供歌舞伎の長浜型など関西系の山車が見られる。」

Web で述べられていることに全面的に頼ることはできないが、参考にすることは許されよう。

さて、半田の山車は知多型に分類される。一地方ではじまった「まつり」は、相互に競い合いより豪華なものとなっていく傾向があるが、そのあとの課題は継続である。「まつり」はどのように支えられていくのであろうか。つまり、祭りのサステナビリティが、この論文が問題とする、主題である。

Ⅱ．半田の春の祭り（市役所での聞き取り調査）

春の彼岸ごろからはじまる半田の祭りは、半田市内の 10 地区であり、乙川の祭りで幕を開け、亀崎の潮干祭で幕を閉じる。

亀崎地区は、特に古い祭りの形態が残っており、これによって国の重要無形文化財指定を最初に受けることになる。

各祭りは組合が作られて、組合によって運営される。組合費は、月 3000 円程度であるが、町によって違い、この金額が最低限である。商店などは別の寄付を集められる。「車元」と呼ばれる。市からは文化財の保護費として、毎年 14 万円／基が支給されるが、その名目は火災保険 4 万円と修理費に 10 万円である。大きな修理には、市の予算が 500 万円あるが、31 基の山車が順番待ちをしている状態である。基本的に半額補助であるので、1000 万円程度までの修理を賄うことができるが、それ以上の金額は寄付金を集めねばならない。

例えば、新しい山車を作る、というような根本的な事は、この補助金を使ってはできない。もともと新しい山車は文化財とは認められていないので、別の費用が必要とされる。

亀崎地区においては血縁のつながりが大きく、組合員は原則として血縁の子孫であるが、転入してきた人も希望すれば組合に入ることができる。乙川地区も基本的には血縁のつながりによる組合方式がもとである。

祭りの役職は、およそ年齢と参加してからの年数、つまりは経験に応じて決められる。

それぞれの役職は年代会で取り仕切られる。年代会は、祭りとかかわりを持つようになってからの年次で計られるものであるが、同年ないしは同学年の集まりとなることも多く、また結束のよくない年は抜けてしまうこともある。

祭りの近年の形態においては、神社との関連はうすく、したがって歴史民俗文化行事ととらえて市役所からの補助を得ることも可能との立場もある。春の祭りは、神社との関係が比較的強く残っており、市からの補助も比較的小さい。このことが、秋のはんだの山車まつりとも関係があるようにも考える。

その他の地区は、むしろ地縁のつながりで費用の負担をしている。区費から祭りの費用も出されている。そのため、誰でもが希望すれば、申し出れば参加できる。女性は祭りにおいては本来参加を禁止されていた。しかし、近年まず山車の曳行に参加を許され、また囃子方にも認められ、山車の本体への接触が許されるようになってきている。

Ⅲ．岸和田の祭

大阪府、岸和田のだんじり祭は、勇壮に地車（だんじり）を曳きまわすので有名になった祭りである。近年、テレビで中継放送があるなど、近畿地方を中心に、人気のあるまつりである。この祭りに関しては、近年、祭礼の組織、祭りの伝承、祭礼の費用とその負担、都市祭礼としての発展、祭礼に対する行政

の役割など研究が進んでいる。その考察から、祭礼の社会経済モデルが考案され、特にそのサステイナビリティ（継続可能性）について追求されている。そこで半田の祭りとの対比において岸和田の祭りを紹介しておこう。

都市の祭りの多様になっていく様(さま)を、「見られる祭り」から「見せる祭り」への変容としてとらえている。しかし、参加している人（若頭クラス）の人に聞くと、「見せる」ことなど「とんでもない」、安全に配慮しながら祭りを行う上で、見に来る人が少ないほうがよい、という意見もあるとのことである。

祭礼組織は、世話人（概ね 46 歳以上)、若頭（36 歳以上)、組（26 歳から)、青年団（16 歳から)、少年団（中学生)、子供会（小学生以下）と年齢ごとに組織がある。また、大工方と呼ばれるだんじりの方向転換などを屋根の上で指示する者や、前梃子係と呼ばれる専門的な役割を負う者は、若頭クラスまたは組から選ばれる。

祭礼組織には、年番組織という祭りを統括する組織がある。年番組織は若頭や曳行に際して危険の最も多い後梃子警備の協議会、千亀利連合の代表によって支えられている。

祭礼組織は町会（自治会）ごとに、したがって地縁組織で運営されている。しかし、現実には今は町内に住んでいないけれども、祭礼には参加する人もいる。このような人を含めた組織は祭礼町会と呼ばれているが、祭礼町会は、以前は町会に住んでいたものがほとんどであるが、新しく祭礼町会に入る者もいる。その多くは、少年団、青年団までの年齢でなければ、祭礼町会に入るのはむつかしい。

見せる祭りへの変容は、1957 年には法被を祭礼町会ごとに統一、1963 年だんじりパレード、1964 年曳行の一方通行化、1993 年にはだんじり会館がオープンし、1994 年からは有料観覧席の設置、2006 年には祭礼日を敬老の日に合わせて移動させることが始っている。祭礼日の移動は、関わる人がサラリーマン化したため、休日を、happy Monday を利用してより多くの人が参

加できるようにしたためである。60 万人程度あった観光客が 2004 年と 2005 年には半減しているが、2006 年には 61 万人に回復した。

図１　岸和田だんじり祭の祭礼組織

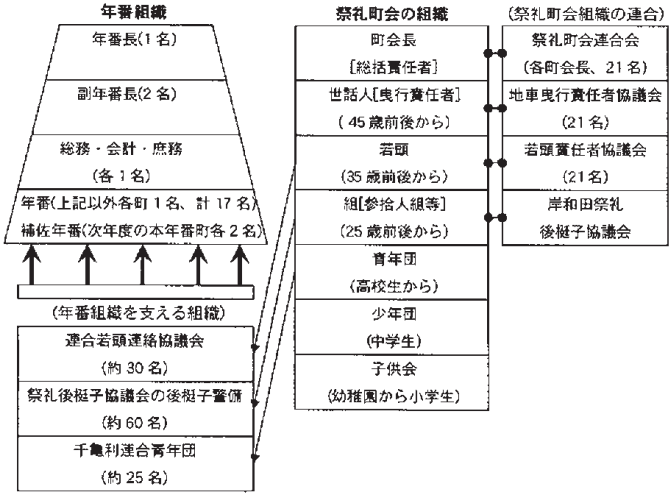
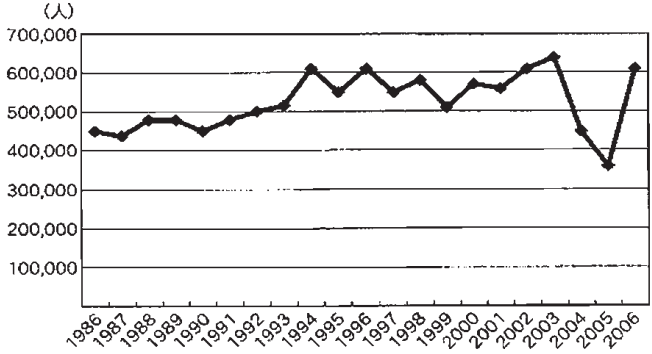


図２　岸和田だんじり祭の観客数（２日間の合計人数）



山田・石田・井上論文より作成

Ⅳ．はんだの山車まつり（５年に一度、市役所や商工会議所等が募って開催）

半田にはもう一つの祭り、自治体の発案による「はんだの山車まつり」がある。もともと、Ⅱ章で述べたように市内 10 地区において山車をもち、年に一回曳き回されている。

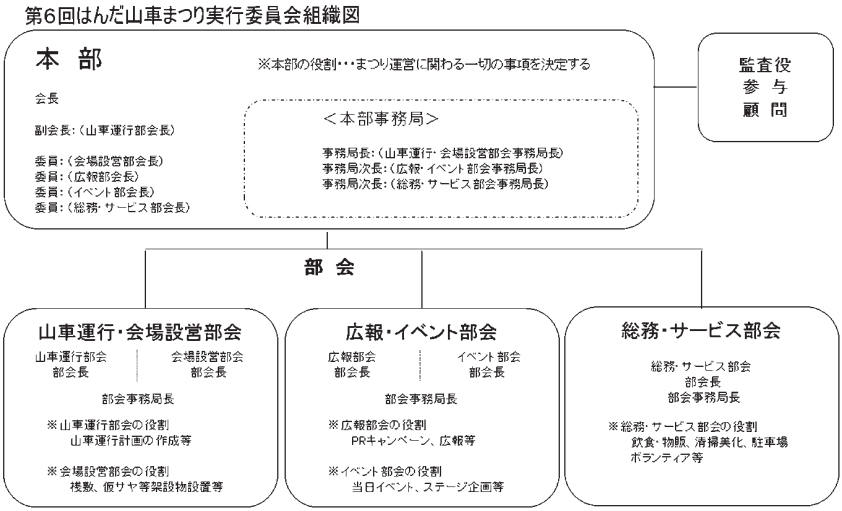
愛知万博の折、他の市町村の山車と同様に曳き出され、一堂に会した。この地方には、多くの市町村に同様の祭りがある。例えば三河地方、尾張地方、知多地方にはそれぞれ山車祭りがあり、岐阜には岐阜・飛騨の山車祭りがある。この地方の山車祭りには、「からくり人形」が乗ることが多く、各町で「からくり」を競うように演ずる。東海市の太田祭、横須賀祭などは「どんてん」とよばれる。文字を書く「からくり」の評判が高い。

多くは、江戸時代に始められ、それ以前の祭り、例えば津島の祭りでは、山車は「だんじり」と呼ばれ、信長が参ったと伝えられる。

さて「はんだの山車まつり」は、祭りは５年に一度秋に行われ、組織も併せて作られる。愛知万博の折、曳き揃えられたが、それ以前から行われている。

近年、祭りの運営には、いろいろな人が関わっている。祭りのプロデュースをしているのが半田市である。半田市の商工観光課が取り仕切っている。各町が山車を出しており、その曳き手は当該町の高校生らのボランティアも参加する。（右の図を参照されたい。）また、役員は地元の商工会議所のメンバーである。

図３　はんだの山車まつり　組織図



Ⅴ．まとめ

岸和田のまつりは、1703 年に始まったとされる。半田の祭りの始まりは、亀崎の潮干祭りに限ってみれば 15 世紀の後半のことであるとされる。しかし、今の形になったのは、文化文政期のころと推測され、いずれにせよ江戸時代の後期に最も盛んであったようである。現代まで続いているものの、いづれも変容が進んでいる。社会構造や人の気質が変わってきたからである。

例えば、もともとの祭そのものに対してであるかどうかは別として、都市（自治体）の支援介入がある。山車そのものの維持や管理運営も変わってきている。これは曳きまわす道路の整備や舗装材の変化も関係している。岸和田では、山車の車輪の使う材木の心配を始めている。

また、税金を投入することによって、平等に参加できねばならなくなり曳手不足もあって、女子の参加が認められるようになってきている。

このように変容が生ずることを、岸和田の方では、仕方ないとしながらも、

それゆえ魅力的な祭りが続くことを「よい」方向でとらえている。また、半田では、５年に一度の祭りをつくることにより、「新しい」方向を展開している、といえよう。

参考文献

http://dashi-matsuri.com/dashikan/owari/tus_ten　2009.06.11
「都市祭礼の社会経済的側面―岸和田だんじり祭の運営を中心として」、山田浩之・石田信博・井上馨、文化経済学会（日本）・文化経済学、第６巻第２号、2008.9
「はんだ山車祭り平成 19 年第６回記録集『極』」、第６回はんだ山車祭り実行委員会、2008（平成 20 年）．2